Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語と韓国語における感謝・謝罪表現の研究
Author(s)	秦, 秀美
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49201
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【11】

氏　　名	秦（チン）　秀（ス）美（ミ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２２３０３　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年３月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**日本語と韓国語における感謝・謝罪表現の研究**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授 小矢野哲夫 （副査） 教　授　仁田　義雄　　教　授　三原　健一　　教　授　鈴木　　睦 准教授　小西　敏夫

論 文 内 容 の 要 旨

本稿の目的は、日本語と韓国語の感謝と謝罪のコミュニケーション・ルールを提示し、異文化間コミュニケーションを考える上での記述をすることによって、外国人との接触場面で起こるさまざまな問題に対処するための手掛かりの一つを提示することであった。本稿では、感謝と謝罪の言語表現が日本語と韓国語でどのように使われるのかを、ドラマを資料にして考察した。

日本語と韓国語の感謝と謝罪を比較対照した先行研究は、「定型表現」を中心とした語彙的な問題に偏っているか、あるいは逸話的なエピソードが語られている程度にとどまっており、「定型以外の表現」を含めた総合的なアプローチの分析は少ない。「日本語に比べると、韓国語には感謝と謝罪の言語表現は少ない、あるいは行われない」という指摘は度々あるが、このことは単に「感謝や謝罪をするか、しないか」「礼儀があるか、ないか」という結論に結び付けるような問題ではない。この問題が何に起因するかを解明するため、本稿では感謝と謝罪の言語表現ストラテジーを「定型表現」と「定型以外の表現」に分類し、日本語と韓国語でどのような発話が感謝や謝罪として受け入れられているかという言語表現の仕方の相違にまず考察の焦点をおいた。そして、感謝と謝罪の言語表現が必要であると判断される状況の相違について考察した。

感謝の考察では、まず、日本語は「定型表現」のバリエーションが多様であるのに対し、韓国語は「定型表現」のバリエーションが少なく、「定型表現」は「감사하다（カムサハダ）」類と「고맙다（コマップダ）」類によってほとんど担われている特徴が見られた。

資料全体における感謝の言語表現ストラテジーの出現率を見ると、日本語と韓国語、ともに「定型表現」を用いた感謝の直接的な表現が主に使われている点では変わらない。ところが、日本語では「定型表現」の全体に占める割合が 94.7%とかなりの出現率で現れているのに対し、韓国語では 66.4%にとどまっており、「定型以外の表現」のみの使用も 25.8%に及んでいる。日本語では、感謝の場面で必ずといっていいほど「定型表現」を使うが、韓国語では「定型表現」を使わない場合が 25.8%もある。特に、韓国語では親の関係で「定型以外の表現」のみによる使用が著しく表れる。対して、日本語では親の関係であっても「定型表現」は必ずといっていいほど使われており、「定型以外の表現」のみによる使用は「ありがとう」と言われなかったという不快感を覚える原因ともなりうる。

このように、親の関係になると「定型以外の表現」のみがよく使われる韓国語と、親の関係であっても「定型表現」

の使用が好まれる日本語との間で感謝の言語表現ストラテジーの選択に相違のあることが明らかになった。

また、日本語と韓国語では感謝の言語表現使用の相違のみならず、感謝の言語表現が必要とされる状況の認識にも違いのあることがわかった。たとえば、日本語では「気をつけて」「頑張って」など、日常の挨拶的に定型化した気遣いや励ましのことばに対して感謝の「定型表現」をするが、韓国語ではこのようなことばに対しては、感謝の「定型表現」をしないため、感謝の言語表現をすべき状況として認識されていないことがわかる。

謝罪の考察については、まず、本来の謝罪の内容を「話し手（話し手側に属している者を含む）の言動が原因となり、聞き手（聞き手側に属している者を含む）に物理的な損害、時間的、経済的な損失、身体的または精神的な不快感、心労等をもたらした状況」（以下「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」と呼ぶ）と限定し、比較対照した。調査結果では、日本語では謝罪の「定型表現」のバリエーションが多様であるのに対し、韓国語の謝罪の「定型表現」のバリエーションは少なく、「미안하다（ミアンハダ）」類（47%）と「죄송하다（チェソンハダ）」類（44%）によってほとんど担われている特徴が見られた。

資料全体における謝罪の言語表現ストラテジーの出現率を見ると、日本語でも韓国語でも謝罪の「定型表現」が占める割合が高い。しかし、日本語の「定型以外の表現」のみの使用は 2.4%にすぎず、ほとんどの例で「定型表現」が使用されており、「定型表現」の存在が必要不可欠であるように思われる。これに対して、韓国語では、親の関係で謝罪の内容が軽いものの場合、気配りの表現や自分の失敗を認めるなど、「定型以外の表現」のみによる使用（16%）が目立っている。このことは、親の関係で謝罪の内容が軽いものの場合であっても必ず「ごめんね」などの「定型表現」が第一発話として選ばれる日本語との相違点でもある。

一方、日本語の謝罪の「定型表現」、特に「すみません」は通常考える謝罪の状況には収まりきらないほどの幅を持つ。そこで、話し手の不適切な行為が見られず、聞き手の損害や不快感も見当たらないにもかかわらず、謝罪の「定型表現」が使用される例を集め、その使用される状況に着目し、どのような状況にまで謝罪の「定型表現」が使えるかを日本語と韓国語で比較対照した。その結果、「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」が見当たらない状況での謝罪の「定型表現」の使用は、何らかの形で話し手が聞き手を居心地悪くさせると思わせる部分があるからであり、その原因は大きく「聞き手の負担」、そして「聞き手の個人領域」という問題と深く関わっていることが明らかになった。

「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」がある例とそれ以外の例を含めて、資料全体における謝罪の「定型表現」の出現率の調査では、韓国語の謝罪の「定型表現」が主として「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」を認める状況で使用されていることがわかった。これに対して、日本語の謝罪の「定型表現」は、「聞き手の個人領域」の問題と関わりを持つ状況での使用件数が全体の 40%以上の割合を占めており、韓国語に比べると、その使用率が高いことがわかる。また、「聞き手の個人領域」という問題と関わりを持つ状況での謝罪の「定型表現」の使用は日本語の方が広範にわたって使用されており、特に「聞き手の個人領域への入り込み」における例が目立って多い。

次に、韓国語では「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」が見られない場合、どのような言語表現が聞き手の良好な関係の維持のために選択されるか、あるいは工夫を必要としないのかを考察した。その結果、日本語においても韓国語においても、「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」が見られない状況、詳しくは「聞き手の負担」、「聞き手の個人領域への入り込み」や「共有領域からの一時的な離脱」、そして「聞き手の内面の欲求に対する不十分な提供」の場合、相手への配慮として何らかの気遣いが示されることがあるという点では違いがない。しかし、使用される言語表現や配慮を示す必要があると判断される状況は異なっており、韓国語では相手との親疎関係がその判断に主な影響を与える要因として働いていることがわかった。

日本語では親の関係であってもささいなことであっても「聞き手の負担」、「聞き手の個人領域への入り込み」や「共有領域からの一時的な離脱」、「聞き手の内面の欲求に対する不十分な提供」に該当する内容である以上は、相手への配慮として謝罪の「定型表現」の使用がより適切とされている。これに対して、韓国語では話し手と聞き手との仲間意識がもっとも優先される傾向がある。特に、親の関係で、ささいなことである場合、韓国語では謝罪の「定型表現」の使用が見られないことも少なくない。

このような「聞き手の負担」の発生、「聞き手の個人領域」という問題と関わりを持つ状況についての考察に関しては、日本語では聞き手との良好な関係の維持のために、謝罪の「定型表現」が必要とされる傾向にあるが、韓国語では聞き手との良好な関係が維持されているからこそ謝罪の「定型表現」が必要とされない傾向にあることが窺えた。

以上のように、本稿では日本語と韓国語の感謝と謝罪の言語表現は表面的には多くの共通点を持っていながらも、その使われ方においては両言語で異なる点の多いことを明らかにした。「日本語に比べると、韓国語の感謝と謝罪の言語表現は少ない、あるいは行われない」という指摘が、単に「感謝や謝罪をするか、しないか」「礼儀があるか、ないか」という問題ではなく、感謝と謝罪の言語表現の選択の問題、状況の認識の相違に起因することを解明し、日本語と韓国語の感謝と謝罪のコミュニケーション・ルールを提示することができた。

最後に、感謝と謝罪の考察結果から得られた知見を統合することにより、日本語と韓国語の両言語において、感謝と謝罪がどのような関係にあるのか、そしてまた、その感謝と謝罪の言語表現の背景にある親の関係における対人関係の違いとの関係をまとめることができた。日本語においては、「聞き手の負担」は感謝と謝罪のどちらの状況においても存在するものと見ることができ、そのために「聞き手の負担」の存在が感謝の場面において謝罪の言語表現を使用する要因となるのである。これに対して、韓国語においては、聞き手がもたらしてくれた「話し手にとっての利益」に対しては感謝、「聞き手が被る具体的な損害や迷惑」に対しては謝罪と、比較的はっきり分かれていると言える。また、韓国での親の関係は自己と自己の重なり合う共有領域をできるだけ広げてゆくことで一体感を求める付き合い方であるのに対し、日本では互いの個人領域に抵触することなく、一定の距離を保った上での付き合い方であることが感謝や謝罪の言語表現の違いをもたらしていることを指摘した。

論文審査の結果の要旨

本論文は日本語と韓国語における感謝表現と謝罪表現をコミュニケーション・ルールを提示し、異文化間コミュニケーションを考えるうえでの記述をすることによって、外国人との接触場面で起きる諸問題に対処するための手がかりを提示することを目的として書かれたものである。

感謝表現、謝罪表現それぞれを日韓対照の観点から論じた先行研究はあるが、両者を扱ったのは本論文が初めてである。

従来の研究は感謝表現にしろ謝罪表現にしろ、「定型表現」を対象にしている。この形式を使用するかしないかという点をとらえて日韓双方の文化的な違いを指摘するといったものがほとんどであった。本論文は、「定型以外の表現」をも扱うことで、感謝行為、謝罪行為に対する日韓双方の文化的な違いを解明しようとした。その結果、感謝すること、謝罪することは日韓いずれの文化にも存在するということを確認し、異なるのは主に定型表現を使用する文化なのか主に定型以外の表現を使用する文化なのかという違いがあることを明らかにした。このことは、従来の研究では未解明であった感謝表現・感謝行為、謝罪表現・謝罪行為の、より本質的な特徴を明らかにしたことになり、大きな功績であると評価できる。特に、吹き替えのテレビドラマを使用することによって、原語での表現と翻訳での表現に違いがあることに着目したことがいい結果に結びついた。

分析対象としたテレビドラマの数も、数量的な分析に耐えるだけの量であり、丹念に分析されている。映像資料を使うことによって、感謝表現・感謝行為、謝罪表現・謝罪行為にかかわる対人関係、発話状況、発話の表情といった言語外的要因を参照することが可能になり、言語形式だけを分析していたきらいのあった従来の研究に新しい視点を導入したという貢献も評価できる。

本論文は、「第一章　はじめに」「第二章　方法論」「第三章　感謝」「第四章　謝罪」「第五章　感謝と謝罪に共通する日本語と韓国語の相違」「第六章　まとめ　日本語と韓国語における感謝と謝罪の関係」の合計６章から構成されている。

「第二章　方法論」では先行研究における方法論の長所と短所を検証し、談話完成テストやロールプレイでは十分に明らかにできない問題があることを指摘したうえで、テレビドラマが言語資料として有効であることを提案している。

「第三章　感謝」では、先行研究では十分に解明できたとはいえない、残されている課題を指摘し、感謝の言語表現ストラテジーとして、従来から分析対象とされてきた「定型表現」のほかに、「定型以外の表現」を対象とすることの有効性を主張する。分析に際して、人間関係における親疎関係及び上下関係を基準として日本語と韓国語におけ

る二種類の表現の使い分けを明らかにしょうとした。従来、韓国人は感謝表現をしないといったことがよく指摘されていたが、実はそうではなく、親疎関係の「親」の相手に対しては定型表現を使用した感謝表現をしないのだという、より深い部分が明らかになり、定型以外の表現を使用することによって感謝を表現しているのだということを明らかにした。上下関係については、上から下への関係、対等の関係、下から上への関係において、日本語と韓国語で、二種類の表現の使い分けには明確な差を見いだせないことを明らかにした。感謝においては親疎関係の基準が日本語と韓国語における行動・表現に顕著な差をもたらしていることを明らかにした。いずれも、データによる実証である。さらに、感謝の対象となることがらにおいて、「気遣い・励ましのことば」「勧め・申し出」において日本語と韓国語で相違があることも明らかにした。

「第四章　謝罪」では、「聞き手の個人領域への入り込み」「共有領域からの一時的な離脱」「聞き手の内面の欲求に対する不十分な提供」という概念を用いて定型表現が使用される状況を分類し、謝罪の定型表現が使用される offense の内容を分析した。この結果、日本語では聞き手の領域と関わりを持つ状況での定型表現の使用が広範であり、聞き手の個人領域への入り込みの例が目立つことを明らかにした。

「第五章　感謝と謝罪に共通する日本語と韓国語の相違」では、後日の感謝と謝罪、感謝と謝罪の交替現象を分析し、日本語では謝罪の把握に「聞き手の負担」が関わる度合いがが大きいことを明らかにした。一方、韓国語では、「聞き手の負担」への言及を繰り返さず、「聞き手の厚意」を最優先させる。

「第六章　まとめ　日本語と韓国語における感謝と謝罪の関係」は本論文の結論に相当するものである。

以上のことを総合的に判断し、審査委員会は、本博士論文が博士（言語文化学）の称号に値する十分な業績であるという結論に達した。